

# 環

(あい)

光輝抄	2
琥珀集	6
珊瑚集	15
瑪瑙集	28
紅玉集	30
8月号月評	32
惠贈句集拝見(49)	34
惠贈俳誌拝見(19)	36
特別作品「フランスの旅I」	38
特別作品「オーロラに出会ふ(二)」	40
琥珀集作品鑑賞	42
珊瑚集作品鑑賞I	43
II	44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	45
俳誌交歓	47
他誌転載	48
ひこばえ会通信(18)	50
エッセイ「緑のかおり」	51
世の国父の蒼天(41)	52
金園寺・原谷苑吟行記	54
エッセイ「頓智」	56

今月の一句

耳塚やこの世のものに草と虫  
桂 樟蹊子

(昭和五十一年作)

豊国廟の前の耳塚は、文禄・慶長の朝鮮の役の名残である。「盛り上げた円丘の上の、茫々とした秋の草と虫の音だけはこの世もので侘しかった」と自註にある。「この世のものに」と言う措辞が、当時の戦の残酷さを深く噛みしめている師の心情をうまく伝えている。

隆子

# 白夜餐

塩路隆子

牧草にノルマンデーの夏日かな

夏草を食む百態の牛の群

麦の穂の出揃ふ畑や風青き

薫風や巴里を起点の哩程標

潮風に乗りたる牧歌麦の畑

刻々と迫る僧院夏すがた

北限に醸すりんご酒白夜餐

# 八月号光耀抄

塩路 隆子選

洋酒酌む切子の青の別世界  
賽銭泥棒出でたり昨夜の青葉寺  
言ひ訳はのらりくらりやかたつむり  
日の当る彩に雨降る柿若葉  
青あらし学僧袈裟を翻し  
入梅やバリアフリーの見積書  
昼幽き川にまひまひ河童淵  
見上ぐれば迫る山肌二輪草  
リラ冷の屋台賑はふ大通り  
はるばるとようこそ古都へ熱帯魚  
無駄のなき茶人の所作や夏衣  
柿若葉の木陰ビー玉撒きしごと  
緑蔭に茅葺一戸猫眠る  
新緑の香に包まれてひとり住  
水飛沫く海豚のジャンプ夏の空  
千曲川の歌が吾呼ぶ新樹光  
鱧鮓を玻璃皿に盛り茶屋料理

宮田 香  
松岡 和子  
森下 康子  
落合 晃  
阪本 哲弘  
笠井 清佑  
竹内 悦子  
坂根 宏子  
栗倉 昌子  
増田 一代  
宮崎左智子  
三川美代子  
中川すみ子  
杉本 綾  
長濱 順子  
西田 史郎  
田下 宮子

薰風の宙に賜はるリングかな  
 新茶汲み使ひ慣れたる唐津茶器  
 古代魚の前を遠足滞る  
 源氏名の風送りたる古団扇  
 夏きざす祖母懐かしき黄楊の櫛  
 玻璃磨くうしろに気配揚羽蝶  
 夏草の花にもありぬ美の意識  
 セーヌ川の白夜に映ゆるエッフェル塔  
 みどりさす少女の胸乳高かりし  
 五歳児に天牛ぎいと鳴かざる  
 実桜やインターンの子と至福どき  
 満願の西国巡礼田植季  
 枇杷の実を揺らす一輛電車かな  
 田植どき農夫ひとりの影動く  
 麦嵐ひと夜獣を放つかに  
 指の間に枇杷やはらかく歪みけり  
 子育ての燕にエール鄙の駅  
 麦秋のSLを追ふカメラマン  
 雲海にジャックと豆の木を探す  
 川下の街騒風のきんぼうげ

山口キミコ  
 田中浅子  
 常田 創  
 津田 富司  
 川崎 利子  
 西郷 慶子  
 笹井 康夫  
 塩路 五郎  
 辻 香秀  
 小西 和子  
 小林 成子  
 池田加寿子  
 石川かおり  
 伊藤 和子  
 小澤 菜美  
 吉田 希望  
 和田森早苗  
 藤本 秀機  
 岡 佳代子  
 伊東 和子

夏の日を一気に吐ける水車かな  
 朝粥のはったい挽く香鄙の宿  
 あめんばう六角形におよぐべし  
 天に金環「クレオパトラ」の薔薇は地に  
 ゲスト皆婚の証人新樹光  
 大塚小塚不吉に匂ふ梅雨の茸  
 おひさまのゆびわを描く児聖五月  
 梅雨深し瞽女の通ひし塩の道  
 鯨絵の洒脱を愛でて陶枕  
 値を叩き台をたたきてバナナ売  
 橡餅を食べつつ橡の花仰ぐ  
 脅さるる忍者まがひの夜の守宮  
 小手毬に翅ある虫の集まりぬ  
 風吹けば蚩袋の灯が揺るる  
 井戸水に採りたてトマト冷やしけり  
 ふるさとを知らぬゴリラの昼寝かな  
 金環のひと刻過ぎぬ薄暑光  
 往年のジャズにときめく夏の宵  
 葉より葉へ光の雫著莪に雨  
 里に咲けば更に気高くアンネ薔薇

五十嵐 勉  
 北尾 章郎  
 和田 郁子  
 新実 貞子  
 鈴木 照子  
 坂上 香菜  
 藤見佳楠子  
 井口 淳子  
 中村 ふく子  
 中本 吉信  
 伊藤 純子  
 国包 澄子  
 難波 篤直  
 西村 敏子  
 能勢 栄子  
 高谷 栄一  
 谷口 俊郎  
 辻 知代子  
 佐用 圭子  
 片岡久美子

こでまりや少女の髪のカール揺れ  
 解禁日いづれも大き囀  
 母見舞ふ親子連れなる夏帽子  
 奈良漬を買うて日傘の持ち重り  
 攫はるる帽子につばさ春嵐  
 肅々と大気に息吹夏暁かな  
 茫々の螢火神秘雨上り  
 太陽へ着陸の月初夏の空  
 山椒に揚羽幼虫しがみつく  
 灰色の空と稜線梅雨に入る  
 野に咲けば野の花となるマーガレット  
 母の日に貰ふ労り絆かな  
 物忘れの母の言葉に青田風  
 田に映る雲に乗りけりあめんぼう  
 湖静か対岸灰と花あふち  
 初夏や五百羅漢の座禅堂  
 唄ひだしさうな紅薔薇マリアカラス  
 お奨めの地酒切子の青映し  
 友訪ひぬ目印高き桐の花  
 菖蒲湯に五体預けて深呼吸  
 風叩くかに葦切の鳴き通し

桂 敦子  
 紀川 和子  
 前川 ユキ子  
 木戸 宏子  
 北田 敏子  
 小林 久子  
 飯田 美千子  
 伊藤 憲子  
 稲田 和子  
 伊庭 玲子  
 大島 みよし  
 大松 一枝  
 山崎 里美  
 山内 節子  
 山本 孝夫  
 山本 孝夫  
 山本 丈夫  
 横田 矩子  
 松田 和子  
 松田 和子  
 秦 和子  
 福本 すみ子

# 琥珀集

若葉光

松岡 和子

賽銭泥棒出でたる昨夜の青葉寺  
木簡の個人情報若葉光

暮れのころ峡の生水の花藻かな

青嵐をんなも交じるツーリング

義民碑へつづく胸突き青葉坂

峡の口青大将に封鎖され

青葉山つま先で立つ三角点

金魚草

森下 康子

花胡瓜雄蕊雌蕊を兎と学ぶ

言ひ訳はのらりくらりやかたつむり

寂しさを閉じ込めてゐる梅雨の部屋

訳ありの札の下がりし白日傘

サマータイム時差ある国は午前二時

髪切りて少女の匂ひ金魚草

皿の鮎跳ねる形をそのままに

パセリ

宮田

香

金環蝕過ぎて陽光早苗の田

ピザ料理仕上げの色のパセリ摘む

雨催ひ翅を納むる黒揚羽

洋酒酌む切子の青の別世界

七星の気泡生みたる葛ざくら

青簾揺るる茶店の抹茶。パフエ

ダービーのスタート一瞬静寂かな

薄 暑

落合

晃

バリアフリー

笠井

清佑

日の当る彩に雨降る柿若葉

一と夜さに嵩成す柿の花を掃く

褒められて淹れる新茶の雫まで

本心はなみなみ欲しき新茶かな

あの甕を鳴らすのは誰アマリリス

太陽を掲げて開花アマリリス

着流しの力士に出合ふ街薄暑

青あらし

阪本

哲弘

かたつむり

竹内

悦子

磨る墨の香り豊かや夏はじめ

球場の白きウエーブ更衣

賜りし知覧の新茶汲み分くる

割烹や芍薬挿せる夜の宴

青あらし学憎袈裟を翻し

ステッキに委ぬる方途木下闇

夏帽の遺伝子は魚海へ飛ぶ

麴に噎せかへりしを祖母笑ふ

万緑に聞く濤声や御影堂

入梅やバリアフリーの見積書

梅雨の朝フランスパンを斜め切

高円山たかまどの麓一望田水張る

水芭蕉歩荷の歩み確かなり

入梅や加齢の脈の乱れける

昼幽き川にまひまひ河童淵（遠野二句）

コンバイン備ふる農家短草

冷蔵庫どんと納まる新居かな

引つ越しの子の荷多しや梅雨晴間

をさな兒の宝となれりかたつむり

老鶯の美声聞きつつ朝湯かな

出港の烏賊釣舟や沖目指し

二輪草

坂根 宏子

誘ふは紫紺のすみれ伊吹山  
見はるかす草原踊子草にかな  
見上ぐれば迫る山肌二輪草  
はつ夏へ季の移りけり残り雪  
夕月夜近江平野の麦の秋  
風蒼く森青蛙染めて過ぐ  
格子戸越しに仏陀の世界青葉闇

リラの花

粟倉 昌子

はるか来て真つ只中のリラの街  
街の辻つなぐむらさきライラック  
リラ匂ふベンチに憩ふ午後三時  
ライラックにふと想ひけり妣のこと  
若葉風路上ライブの部活動  
リラ冷の屋台賑はふ大通り  
リラの香の深まる夕べ北の街

一日切符

増田 一代

街巡る一日切符夏浅き  
川風が薔薇の香運ぶ中之島  
薔薇園に浪速夫人のエレガント  
水の街満開の薔薇華やかに  
夕暮れて水族館の星涼し  
はるばるとようこそ古都へ熱帯魚  
鰻を餌に緻密な演技イルカショー

夏衣

宮崎左智子

病む夫に常なき生活梅雨の入り  
無駄のなき茶人の所作や夏衣  
自販機にのこるつり銭梅雨じめり  
氏素性なき睡蓮の淨らなり  
一村を制覇するかに青蛙  
せり市の金魚ふりまく御愛敬  
揚羽蝶は母の紋です薄羽織

風薫る

三川美代子

忍野泊の真向ひに富士夏座敷  
コンサートの余韻御所まで風薫る  
マリンバの百の音色や夏に入り  
今世紀の天体ショーや松の花  
金環蝕僅かに暗き夏の湖  
柿若葉の木影ビー玉撒きしごと  
五月尽日蝕メガネは小抽斗

(金環蝕時)

薔薇の町

中川すみ子

雷鳴の轟く湖上昼の闇  
緑蔭に茅葺一戸猫眠る  
新緑の中を音なく屋形船  
竹の皮脱ぐ瑳蛾野路の音幽か  
薔薇の香を纏ひて宿の温泉に浸る  
(熱海三句)  
最古なる電話ボックス薔薇の町  
紅薔薇を残して赤きバスに乗る

沙羅の花

杉本 綾

時鳥三日月淡き日暮かな  
新緑の香に包まれてひとり住  
霞草活けをりクリスタルの壺  
来訪の人へ新茶と和菓子かな  
道草の児の手に余る白つめ草  
小雨降り出づるせせらぎ遠河鹿  
側々の受話機の友や沙羅の花

紫蘇畑

長濱 順子

ペンギンの潜水見事夏兆し  
水飛沫く海豚のジャンプ夏の空  
笠広げ闇に揺らめく水くらげ  
雄大に鱒のはためきよぎりけり  
山間の紫蘇畑なびく大原路  
植糸残す四隅の手植薄暑かな  
庭師の守る森青蛙泡の房

# 瑠璃集

## 篝火

シテの鶉とワキの鶉匠や篝火に  
風光る一輪挿の無人駅  
万歩計つつじ燃えたる京街道  
螢火の飛び交ふ闇の深さかな  
雲海にジャックと豆の木を探す

## きんぽうげ

梅雨夕焼ひとすぢ続く奈良古道  
川下の街騒風のきんぽうげ  
石庭の蔭深まりて梅雨入かな  
丁寧な余生過ごさむ松の芯  
短夜のあけの神秘や日のリング

## 岡佳代子

## 水車

かすかなる水車の軋み夏木立  
夏の日を一気に吐ける水車かな  
美術館出づれば夏の日暮かな  
白鷺の川上りゆく一羽かな  
川風にヨガのポーズや夏の朝

## 鄙の宿

風を切るフレアーの人半仙戯  
新茶汲む検査済証なくもがな  
鉢植の一夜に消えぬ夜盗虫  
補聴器の捉ふ老鶯深山かな  
朝粥のはつたい挽く香鄙の宿

## 四葩

曲水の庭に沿ひたる花さつき  
あめんぼう六角形におよぐべし  
庭園に疏水の流れあやめ咲く  
広々と杉木立の間の四葩かな  
蓬萊の庭のせせらぎ風薫る

## 五十嵐勉

## 北尾章郎

## 和田郁子

## 八月号月評

塩路 「隆子

洋酒酌む切子の青の別世界

宮田 香

作者に馬の句は多いが酒の句は珍しい。切子とは切子グラスの略であり、カットグラスのことである。江戸切子・薩摩切子などそのカットの美しさに惹かれつい欲しいと思うグラスであるが、いいものは高価で手が出ないものもある。青の切子に洋酒を入れて手に翳すとそのカットの美しさにまるで別世界の感じを受けたと言う。シャンデリアの光を反射するブルーの怪しくも美しいその雰囲気、世俗から離れた「別世界」という措辞を使つてうまく表現された。

賽銭泥棒出でたり昨夜の青葉寺

松岡 和子

甲賀の里の出来事である。平和な里の昨夜は賽銭泥棒が出たと言う。失われた当世に一拍を置いた感の村の出来事を句にされる作者の句にはいつも現実性があり、臨場感があり、またメルヘンがありで素材が面白い。「賽銭泥棒」など最近耳にしない。というよりは賽銭箱に工

夫をされそれが出来ない仕組みになっていると言うのが現実である。泥棒も青葉につられて出かけたところ、昔ながらの賽銭箱にむきだしのお札や硬貨があり、ついついその気をおこさせたものであろう。さてその翌日は「お寺はゆうべは賽銭泥棒にやられたそうな」と里人達の大変な噂。面白い素材をうまくまとめられた。

言い訳はのらりくらりやかたつむり

森下 康子

この作者は前掲の句と違って四年前から東京都内や川崎市と都会の生活を続けておられる。吟行句もさることながら身ほとり句の上手な作者であり、センスのいい句にお目にかかることが多い。関西から関東に移り住まれた戸惑いや、新所帯との同居にも戸惑いが無いとは言えない状態の中で、ユーモアやペーソスを上手く句にされている。言い訳とは「のらりくらり」こう言ったものであろう。「かたつむり」の季語が効いている。ご自分のことではないかもしれないが、蝸牛が殻を持っているように、しっかりと自分を無くさないで土地に馴れ日々の生活に馴染んで欲しいと願っている。